# 危 機 介 入

教師として実感することは、どの児童生徒も、日常生活の中で、「危機的」な状況と背中合わせにいることです。それがまさに「危機」にまで発展する前に、「ずいぶんと無理をしている」「今までと様子が違う」「どことなくその子らしさがなくなっている」ような、いわば「危機の芽」をキャッチし、素早く、適切に支援をすることが求められるといえましょう。

▲▽ ▲▽

## Ⅰ　危機とは何か

教師が日頃接する児童生徒の「危機的」状況は、「平常」の中にあって、自分の力で平常範囲を逸脱しない程度にとどまることができる場合とすれば、「危機」は、次のように考えることができる。

**①児童生徒が、自分の力では元の「平常」範囲の揺れ幅まで戻れない状況**
**②危機と平常の間には、大きなグレーゾーンがあり、その個人差は実に大きい**

⇩

小さな危機を見逃さないことが大切！

## Ⅱ　危機介入の方法

### ①土台づくり

**本人の混乱状況を十分受け入れ、信頼関係を深めることで、不安や緊張を緩和する**

受容のみのにこだわらず、「こうするといいよ」と指示したり、一杯の温かいお茶を飲んでもらうなどの物理的対応も駆使する。

### ②探索・理解

危機をもたらした事件は何か、その前後の様子を中心に、時系列的にじっくり聴く

危機の原因よりも、この危機は何をきっかけにして生じたかを考えた方がいい（原因は本人もよくわからないことも多い）。また、どこからつまづいたかを明確にすることは、それ以前はOKだったことを再認識させられる。

### ③とらわれの発見

その事件について、どのように捉えているのかを明確にし、それも含めて、他の見方がないかどうか話し合う

問題は、その事件を本人がどう感じ、考えてしまっているかにある。それを間違いだとするのではなく、「今、ここでは」そうかもしれないが、他の違った見方や考え方もあり得るのではないかという可能性を話し合う。

### ④ソーシャル・サポートづくり

**今現在、サポートする人的・物的資源があるか確認し、必要な誰かにつなぐ**

本人周辺の、今までのサポート資源を査定する。当面は、本人の目の前にいる「この私」がサポートすることを伝え、さらに必要な誰かにつなぐことを考える

### ⑤戦略メニューづくり

**これまでの危機への対処方法を出発点にしながら、当面この直後からどうするか、納得のいく戦略を話し合う**

これまでの危機をしのぎ、乗りこえてきた方法を、今回はなぜうまくいかなかったのか、その他どのような方法が考えられるか考え、構造化し、紙に書いてみる。やれそうなことから始める。

### ⑥フォローアップ

次回の面接日時をハッキリと決め、そのときまで決めた方法を試みてもらう。結果によってまた再構造化する

本人に任せきりにするには不安がある。次回面談日時を確定し、必要ならその途中で報告を受ける。結果によっては、また何度も対処方法を考え、再構造化していく。

「その場しのぎ」「時間稼ぎ」ができてこそ、次につなげられる

▲▽ ▲▽

【参考文献】　大野精一著,「危機介入の方法」,『月刊学校教育相談』2001，5月号，ほんの森出版